

□海外文献紹介□

Crohn 病、潰瘍性大腸炎、コントロールでのインターロイキン 2 に対する免疫学的反応の違い

Intestinal immune reactivity to interleukin 2 differs among Crohn's disease, ulcerative colitis, and controls: Kazuo Kusugami, et al (Gastroenterology 97: 1-9, 1989)

Crohn 病 (CD) や潰瘍性大腸炎 (UC) の原因ははっきりしていないが何らかの免疫学的機序が関与していると言われている。今回著者らは lamina propria mononuclear cells (大腸粘膜の単核球; 以下 LPMCs) を用い、インターロイキン 2 (IL 2) 産生能と lymphokine-activated killer cell activity (LAK 活生) を測定した。また外因性 IL 2 添加により誘導された LAK 活性も合わせて測定した。

対象は治療として大腸を切除した患者で CD 18 例 (男 5, 女 13. 15 歳~64 歳, mild 1, moderate 14, severe 3), UC 12 例 (男 8, 女 4. 17 歳~62 歳, moderate 8, severe 4), コントロール 28 例 (悪性疾患 17 例, 男 8, 女 9. 腸切除を受けた炎症性腸疾患を含まない良性疾患 10 例, 男 7, 女 3. カルチノイド 1 例) である。

その結果, CD の IL 2 産生能はコントロールの 1/3 であるにもかかわらず, CD とコントロールの LPMCs の LAK 活性には有意な差を認めなかった。これに比べ UC は IL 2 産生能も LAK 活性もコントロールに比べ著明に低下していた。同量の IL 2 添加では CD は UC やコントロールに比べ著明に LPMCs の LAK 活性の上昇がみられたが, UC ではコントロールや CD に比べ著明に LAK 活性は低下していた。

以上より著者らは LPMCs の LAK 活性は IL 2 のみにより決まるものではなく, CD において LAK 活性が正常または増加していることから, CD では IL 2 に反応する細胞が増えているか, IL 2 に対する反応性が高まっているからと推察している。UC で LAK 活性が低いのは IL 2 反応性細胞の消失か IL 2 に対する反応性の低下か, あるいは両方であると推察している。また最近 IL 4 が cytotoxicity を調節すると言われているが, これらを含め今後の検討が待たれると述べている。結論として IL 2 に対する反応の差により, 炎症性腸疾患を鑑別でき, また炎症性腸疾患における免疫学的異常も判明していくのではないかと述べている。

(愛知県がんセンター消化器内科

白子順子 抄)